

2024.4.27.

偶有性をまなざす

— 令和6年能登半島地震をふまえて —

関西大学社会安全学部

近藤誠司

【想定外・想定内】

2024 年は、元日の「能登半島地震」からスタートしました。被災地では、地震、津波、火災、地すべり、海底隆起等の被害によって、いまでも苦しい暮らしを強いられている人が大勢います。

ところで、2 か月後の 2024 年3月には、福島県沖や茨城県南部で地震が発生し、それぞれ震度5弱を記録しました。そして4月には、岩手県沿岸北部、大隅半島東方沖でも地震が発生し、それぞれ震度5弱を観測しています。さらに、4月17日には、豊後水道で地震が起き、愛媛県と高知県で震度6弱の揺れに見舞われました。

2024年に入って、震度5強以上の地震は、“わずか”4カ月近くのスパンで計10回起きたことになります。しかしこれを「自然現象」として、“特異な状況”と断定するのは早計なのかもしれません。日本列島では、毎年のように、それなりに地震が起きていますし、その頻度のアップダウンは、“誤差の範囲”と言えるからです。それでも、もちろん「社会現象」としては、何かこう、不穏な空気に包まれているようでもあります。このように直感している人もいないのでしょうか。いよいよ、「あれ」が来るのかと……。

ただし、このような“熱”は、いつものようにすぐに冷めてしまうのかもしれませんが。安穩とした未来のほうがイメージしやすい人も多いことでしょう。“想定外”という言葉は、良い意味でも悪い意味でも、どちらにも使えます。予想が大当たりしても想定外、予感が大外れしても想定外です。同様に、“想定内”という言葉も、事後的には、いかようにでも使うことができるマジックワードです。「きっと想定外のことが起きるであろうことを、わたしはずっと想定していました」。このような“決め台詞”が、なんの実質も伴っていないことは、だれでも知っているわけです。

【特殊性・普遍性・偶有性】

「災害には個性があって、ひとつとして同じタイプのものはない」という箴言があります。ハザードの種類や規模、季節・天候、発生時刻・場所など、災害の構成要素は無限にあって、しかも常に異なるため、原理的に同一事象は起こり得ないわけです。だから、メディアは、災害の新規性——すなわち、“災害の顔”——を描こうとして躍起になっています。

しかし、「特殊性」を強調すればするほど、世間は事態の「異質性」を実感することになります。要は、「今回は」（今回も）自分の暮らしとは関係がない出来事なのだから、「対岸の火事」だったと

素早く片付けて、“安心”(se-cura)してしまうのです(矢守, 2013)。ただし、このような心の機序をひとたび許してしまうと、「だれの身にも起こり得る」という事態の「普遍性」を導き出す機制が簡単に挫かれてしまいます。本来であれば自分たちの身に引き寄せて、「わがこと」(教訓)にしなければならなかったはずなのに……。

このような悪循環を打開するためには、単純素朴に事態の「類似性・共通性」を強調しているだけでは不十分です。同じような人口規模なのか、同程度の高齢化率なのか、産業構造は相同なのか、アクセス路の地盤条件は同じなのか等々、要素を分解して「類似性・共通性」を抽出する作業に(だけ)目を奪われてしまうと、事態の「普遍性」は、どんどん切り詰められてしまうからです。

ならば、どうすればよいのでしょうか。わたしたちが災害の「特殊性」から「普遍性」を手にするために通るべき“迂回路”は、事態の「偶有性」(contingens)に着眼することにあるはずです。“他でもあり得た”という「想像の翼」(the wings of the imagination)を広げる道行きのことです。能登半島地震を例にとれば、それは別の季節でも起き得たし、闇夜の不意打ちだった可能性もあったし、もっと強い揺れが巨大な構造物に——それこそ、絶対に壊れてほしくない原子力発電所のような頑丈な人工物にさえも——深刻なダメージを与えていたかもしれないし、全く別の場所で——たとえば、都市部や島嶼部、もしくは、“自分が住む場所”において——起き得たはずだったと思いをめぐらせることです。「偶有性」の視座があれば、社会はより多くの教訓を手にすることができるでしょう。

【確率論・決定論】

災害に真摯に向き合う道行きを選択するならば、社会は「偶有性」——もっと他でもあり得た——の視座を確保しなければなりません。各地で頻発している災害の経験を決して無駄にはせずに「他山の石」にしていけるのだという、強い覚悟が求められます。

しかしそうすると、被害の想定は“何でもあり”になってしまいそうです。“最悪の最悪”もある。“最悪の最悪の最悪”もあるかもしれない。嫌なパターンの組み合わせなんて、それこそ無限に近いわけです。もはや、きりがいいではないか。そんな反論・反発が沸き起こってきそうです。

そこで登場するのが、「確率論」の考え方です。リスクが高いエリアを割り出し、物事の優先順位を見定めます。現実的な“落とし処”を探ろうではないかというアイデアです。たとえば、地震であれば、日本社会では首都直下地震や南海トラフ地震などの(長期)確率評価を発表しています。もし、確率の数値が「(相対的に)高い」と判定されたならば——そしてそこに、社会が守るべき重要度を認めるならば——、レッドゾーンにこそ資源を集中投下すればよいことになります。これは、至極、“理”にかなっているように感じられます。「合理的」のように見えます。

ところが、実は「確率論」だけでは人の心は動かない。知識が信念に育たなければ、着実な行動は惹起されないのです。そしてそもそも、30%の確率だから 30%だけ行動するというわけにはいかないし、仮にそんな中途半端なふるまいをしても、命を守る上では、ほとんど役に立ちません。選択肢は、「防災」を実行に移すか移さないかの二択のみです。だとすれば、結局は、ある程度のリスクが存在するときには、そこに「要・対応」案件としてのフラグを立て、潔く「決定論」的に受け

止める他ないのではないか。

このようにして、「確率論」と「決定論」は、太く強くリンクしています。そしてときに、“俗情との結託”のようなことさえもするのです。防災の専門家と呼ばれている人の講演会に足を運び、じっくり耳を傾けてみましょう。縷々詳しく丁寧に最新の知見を“科学的”に説明した後で、結びの一言は、「つまり、備えあれば憂いなしというわけなのです」と“情緒的”に断言しているシーンに出くわすはずです。「確率論」を迂回した(だけの)「決定論」の提示……。われわれは、このようなレトリックに、どこまで本気で付き合い続けなければならないのでしょうか。

【消費・情報化・蕩尽】

問題意識を確認しておきましょう。災害は、わたしたちのあずかり知らぬタイミングやスケールで牙を剥きます。それはだから、いつも「偶然」起きたかのように見える。しかし、よくよく考えてみると、そこには確かにリスクがあったことを見出せます。科学的に事後分析すれば、危難は「必然」に見えてくるのです。

ところで、先述したように、災害のパターンは多様です。他なる可能性、別様の選択肢を考えれば、被害想定書類はどんどん分厚くなるばかりです。「偶有性」を梃子にした防災の拡充策は、確かにきめ細かいものになるのかもしれない。しかしそれでは、「無限定」に過ぎる。そこで「確率論」を持ち出すわけですが、「決定論」的に思い詰めない限り、カリキュレーション／シミュレーションは、市井の人々の心には馴染まないわけです。繰り返せば、たとえば天気予報で降水確率が70%だと言ったとき、傘を70%だけ準備するというわけにはいかない。傘を持つか持たないか、われわれが取ることができる対策は、二択なのです。

ここから構想すべき哲理は、大きく2つあるように感じられます。まずひとつ目は、確率論を徹底的に磨くことです。科学の挑戦は、いま、ここが“主戦場”になっているように見えます。より精細に、より厳密に、より多くのパラメーターを設定して、瞬時にデータが更新されるような手法を編み出していくのです。現有の挑戦を貫徹する——言うなれば、“突き抜ける”——アプローチです。

東浩紀の「オタク論」(東, 2001)をふまえて、大澤真幸が着目したコンセプトに、「データベース消費」というものがあります(大澤, 2004)。オタクは、コミック、アニメ、ゲームなどに登場するキャラクターの情報を精力的に蒐集し、データベースを作成していきます。その後の「オタク」的な行動パターンとしては、オリジナルの物語をコピーし、パロディにし、読み替え、模様したり剽窃したりする、その“いちずき”に特徴が見出されます。本稿の論脈に寄せて言い換えるならば、物語の「偶有性」を最大限に拡張して、どこまでも「情報化」していくのです。このような情報蓄積の作業を自己追究(自己目的化)する無限運動は、いかにも資本主義的であり、科学主義的であり、保守主義的な身構えに見えます。しかしながら、その次元を真摯に観察してみると、単なる「消費」行動を越えた次元にあるように見えてこないでしょうか。「データベース」を媒介にして、彼ら／彼女らは、情報を味わい尽くしているのです。その様は、ジョルジュ・バタイユが示した「蕩尽」の域にあるのではないか。

同じようにして、「防災」の領域においても、「データベース」を徹底する余地が、まだ相当に残さ

れているようです。この先、研究調査・情報蓄積・訓練強化等をはむしゃらに取り組んで、「もうここまで十分やったのだから」、「出せる力をすべて振り絞ってきたのだから」という境位に立つことができれば、将来、“(badのほうの)想定外”に見舞われた時でさえも、「納得・得心」できるかもしれません。全力でプレーし、試合に負けた甲子園球児たちの姿は、かくもすがすがしいではありませんか。あとになって責任を擦り付け合うような無様なことなどしないコミュニティは、ある種の幸せのかたちを体現しているとも言えるのです。

【偶有性 2.0・共進化】

「確率論」的に考え尽くして、しかし、行動自体は大胆に「決定論」的にふるまう。そのような「割り切り」は、ひとつの“達観”であると考えられます。そのことを短見だと批判するのは、狭い料簡です。でもしかし、何かこう、居心地の悪さを感じている人がいることも確かです。さっきまで冷静に“サイエンス”で語っていたのに、オチは結局、マッチョな情緒論・精神論なのかと……。

このような閉塞の“脱出路”として、2つ目の構想すべき哲理をクリップしておきたいと思います。これはあくまでも、試論(私論)なのですが、筆者は、災害情報をめぐる偶有性にはもう一段、メタなステージがあると感じています。ここで、わざと“捨て石”になるようにネーミングしておきます。「偶有性 2.0」です。いかにも、ダサいですね。

これは、一言で片付けるならば、「リスクにきりきり舞いしない生き方を十分に確保していく」道行きのことです。「防災だ、減災だ」と言い募っているのは、現代独自の風潮、日本社会固有の事情に過ぎないのであって、人々の「生き方」自体は、他でもあり得るわけです。千年前の日本列島には、異なる感覚が宿っていました。千年後のこの列島にも、異なる感性が開かれていることでしょう。いま、すこしだけ視野を広げれば——共時的に物事を捉えれば——すぐにわかるはずです。サブサハラやボルネオ島、ヤキ・インディアン生活圏やアマゾンの奥深くなど、現在でも地球上の至るところに自然と溶け合った暮らしぶりが存在しています。そこから多くの人生哲学を学び、よりタフになることもできるはずです。

もちろん同時に、インターネットの“デジタルな闇”に背を向けるのではなく、それをも所与(given)の前提として、「情報の生態系」——密林や砂漠と同じような棲息圏のイメージを持つ——のなかで、わたしたちはサバイブしていくのです。人類と情報が「共進化」(co-evolution)していく道を模索するのです。原理的に言えば、ここで「進化」をアナロジーに使うのであれば、それを「意図して」行うこと——プロスペクティブに設定すること——などできないように思えます。しかし、情報空間を対自化することなくして、人類が幸せな“平衡の着地点”を見出せることなどないではありませんか。自然に戻れとか、書を捨てよとか、そのような短絡した旗振りを支持できるものではないのですから。

だから、もちろん「防災」の理念を手放す必要はありません。わたしたちは、いま、「防災」を“生きる”ことを求められているのです。「苦難の防災」という「今」を忌み嫌うのではなく、「防災の苦難」を梃子にして、もっと現時の豊かな可能性を解放していきましょう。

そのためには、被災地に学ぶこと。学び続けること。学び合うことが求められるのです。

<参考文献>

- 東 浩紀(2001)『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』講談社.
- 大澤真幸(2004)『帝国的ナショナリズム』青土社.
- 近藤誠司(2022)『防災教育学の新機軸——まなび合いのアクションリサーチ』関西大学出版部.
- 中村 功(2021)『災害情報と避難 その理論と実際』晃洋書房.
- 矢守克也(2013)『巨大災害のリスク・コミュニケーション 災害情報の新しいかたち』ミネルヴァ書房.
- 矢守克也(2016)「河田恵昭教授の災害リスク・コミュニケーション 一人間化された自然・現在化された想定・極限化された数値一」,『社会安全学研究』, 6 号, pp.39-49.